

11:1 民の指導者たちはエルサレムに住んでいたが、それ以外の民はくじを引いて、十人のうちから一人ずつ、聖なる都エルサレムに来て住むようにし、あとの九人をほかの町々に住ませた。

11:2 民は、自分から進んでエルサレムに住もうとする人々をみな祝福した。

11:3 エルサレムに住んだこの州のかしらたちは次のとおりである。ユダの町々には、イスラエルの人々、祭司、レビ人、宮のしもべたち、ソロモンのしもべたちの子孫が、それぞれ自分たちの町の自分の所有地に住んだ。

11:4 エルサレムには、ユダ族とベニヤミン族のうちのある者が住んだ。ユダ族では、まずウジヤの子アタヤ。ウジヤはゼカリヤの子、ゼカリヤはアマルヤの子、アマルヤはシェファテヤの子、シェファテヤはマハラルエルの子、マハラルエルはペレツの子孫の一人である。

11:5 次にバルクの子マアセヤ。バルクはコル・ホゼの子、コル・ホゼはハザヤの子、ハザヤはアダヤの子、アダヤはエホヤリブの子、エホヤリブはゼカリヤの子、ゼカリヤはシロ人の子孫である。

11:6 エルサレムに住んだペレツの子孫は合計四百六十八人の勇士であった。

11:7 ベニヤミン族では次のとおりである。まずメシュラムの子サル。メシュラムはヨエデの子、ヨエデはペダヤの子、ペダヤはコラヤの子、コラヤはマアセヤの子、マアセヤはイティエルの子、イティエルはエシャヤの子である。

11:8 彼の次にガバイとサライで、九百二十八

人。

11:9 ジクリの子ヨエルが彼らの監督者であり、セヌアの子ユダがこの町の副監督者であった。

エルサレムは神殿のある特別な場所であり、それだけに攻撃の対象ともなる要衝でした。ここに住むということは、戦いに巻き込まれる可能性が高く、覚悟が必要だったのです。ですから自ら進んでここに澄んだ人々を聖書では称賛の意味で記録しています。

私たちも神様のみわざの要所を担うことがあるでしょう。そのような時には、事なかれ主義で避けるのではなく、重要な役割を栄誉と覚えてチャレンジしましょう。守られるのは主です。その主からほめていただき、祝福をいただけるのですから。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

